地域連携センターNews

ニュース

2021 vol.04

新潟県立大学
University of NIIGATA PREFECTURE

特集1 学生の活動

特集2 教員の活動

CONTENTS

ごあいさつ・地域との連携 …… P1
公開講座開催報告 …… P2～3
学生の活動 …… P4
教員の活動 …… P5

ごあいさつ

～『地域連携センターニュース vol.4』発行によせて～

新潟県立大学は、大学の基本理念である「地域性の重視」を追求し、地域社会に開かれた大学として、さまざまな地域連携や産学官連携の総合窓口となる地域連携センターを設置しています。

地域連携センターでは開設以来、公開講座等による地域住民への生涯学習の場の提供など、産学官の連携や学生の地域社会参加の推進に積極的に活動に取り組んでまいりました。しかし、2020年度は、新型コロナウイルス感染症流行のため、学生、教職員とも地域貢献活動が制限され、忸怩たる思いでいっぱいです。

さりながら、我々センター運営委員は、そんな環境の中でもできる限りの活動を行おうと頑張ってまいりました。その1つの成果が今年度の公開講座の開催です。その内容は、概略ではありますが、本紙に紹介させていただきます。また、苦しい状況ながら、地域貢献に取り組んできた今年度の活動も併せて紹介しております。ご高覧のほどよろしくお願いいたします。

今後も、地域にあるさまざまな思いや願い、課題、ニーズを的確に把握して地域社会の発展向上に貢献し、大学と地域が相互につながりあい、協働して問題解決に取り組んでいくことを通して、本学の教育研究活動のさらなる推進が図られることに期待しています。

地域連携センター長 人間生活学部子ども学科　斎藤 裕 教授

新潟市との連携協議会の開催

本学と新潟市は2009年に包括連携協定を締結して以来、互いに協力し合いながら地域の発展と地域に貢献できる人材の育成に取り組んできました。2021年1月13日には、毎年本学と新潟市が開催している連携協議会がオンライン上で開催されました。大学からは今年度に教員・学生が参加してきた地域貢献活動や、リモート授業の実施などの新型コロナウイルス感染症の感染を防ぐ取り組みについて報告されました。一方、新潟市からはこれまでに行ってきた感染症の感染拡大防止に向けた施策や、コロナ禍での経済活動を促す取り組みについて報告されました。これらの報告を踏まえた意見交換が行われる中で、これからも本学と新潟市とが互いに連携をとりながら地域社会の発展に貢献していくことが確認されました。

(公財)燕三条地場産業振興センターとの連携

燕三条地場産業振興センターでは、毎年秋に燕三条地域のものづくり中小企業が出展する見本市を開催していますが、新型コロナウイルスの影響で、初めての試みとしてバーチャル見本市「燕三条ものづくりメッセ2020」を2020年10月22日、23日の両日開催しました。この催しの一環であるパネルディスカッションも、全面リモート開催となりました。テーマは「コロナ禍が続く困難な状況下での ものづくり中小企業を考える ──グローバル・ニッチトップ企業等の対応と今後の展開──」です。ニッチトップ企業とは、特定の製品分野で極めて高い競争力を有する企業で、その経営者として、埼玉県さいたま市の㈱ベルニクス鈴木正太郎会長、東京都立川市の㈱メトロール松橋卓司社長、三条市の㈱ハイサーブウエノ小越元晴社長をパネラーとし、本学国際経済学部細谷祐二教授がファシリテーターを務め、各地を結んだライブ開催が実現しました。

松橋さんからはコロナ禍で顧客との対面接触が激減する中、営業の要員をインターネットマーケティングの充実に振り向けていること、小越さんからは飲食業の需要が7割減少し本業の厨房機器の受注がストップする中で飲食店用に特化した飛沫防止シート、シールドを開発し全国から多数の注文を得ていること、鈴木さんからはこういう時こそ長期的観点からの取組みが重要との観点から、産学連携を通じて先端技術を生かした新製品開発を進めていることが紹介されました。パネルディスカッションを通じ「ピンチをチャンスに!」という中小企業に向けた力強いメッセージが発せられました。

公開講座
開催報告

新潟県立大学では、2009年の開学以来、
地域の皆様を対象にした有意義な公開講座を開催してきました。
令和2年度は、ポスト・コロナ時代を見据えた
新潟市東区の産業観光をテーマとする公開講座を開催しました。

新潟市東区産業観光の広域展開に向けて

～ポスト・コロナ時代のグローカル戦略を探る～

日時 2021年 1月10日㊐
14:00～17:00

会場 新潟県立大学
大学院棟4101大講義室
オンライン配信（Zoomウェビナー）

パネリスト（発表順）

和田 貴子さん（燕三条地場産業振興センター プライドプロジェクト担当）
尾畑 留美子さん（佐渡市 尾畑酒造㈱専務取締役）
石井 哲也さん（新潟市東区長）
清水 伸さん（㈱博進堂代表取締役社長）
坂井 良宏=スーパー・ササダンゴ・マシンさん（坂井精機㈱代表取締役）
髙橋 彰さん（新潟交通㈱旅行企画課）

公開講座プログラム

13:30	受付開始
14:00	開会・開会あいさつ
14:05~15:30	パネリスト発表
15:30~15:40	休憩
15:40~16:40	ディスカッション
16:40~16:55	質疑応答
16:55	閉会あいさつ
17:00	閉会

コーディネーター

山中 知彦（新潟県立大学国際経済学部教授）

和田 貴子さん　燕三条地場産業振興センター プライドプロジェクト担当

燕三条は、燕市と三条市の二つの市からなります。古くからものづくりのまちとして知られ、包丁、利器工匠具、作業工具、金属洋食器、金属ハウスウェアなど、金属加工を中心とした地域です。

燕三条地場産業振興センターは、地域の優れた製品を展示販売する事業、企業支援をする事業、燕三条を国内外に発信する事業など、産業と観光の拠点となっています。

「燕三条ブランド」を発信するためのアクションプランとして、『燕三条プライドプロジェクト』があります。複数のプロジェクトから構成され、燕三条の魅力を表現するライフスタイルを創造し発信しています。アウトドアメーカーの（株）スノーピーク山井会長と鎚起銅器の老舗（株）玉川堂玉川社長が将来的なビジョンやコンセプトを提案し、約70名の地域の方たちが企画運営を行っています。

例えば、農園主自らが企画する体験型イベント「燕三条『畑の朝カフェ』」では、食材だけではなく、そこで使用する収穫鋏やカトラリー、テーブル、椅子、タープなどをすべて燕三条の高品質な道具で設えることで、燕三条を体感していただくことができます。

また燕三条では、工場を開放して製造現場をお客様に体感していただく工場見学イベント「燕三条 工場の祭典」を2013年から続けてきました。地図を片手に各自が思い思いに興味のある工場を巡り、職人が魅力を最大限発揮できる工場で誇りをもって取り組む姿を見ていただくという取り組みです。7回目の開催となる2019年の来場者数は56,000人で、海外から来られる方も増えています。目標は、燕三条を「ものづくりの聖地」にすることです。

燕三条の魅力を海外に発信するために専門部署を立ち上げて4年目になります。これからも、日本、世界にむけて情報発信していきたいと考えています。

尾畑 留美子さん　佐渡市 尾畑酒造㈱専務取締役

1995年、酒蔵を継ぐために（尾畑酒造専務、五代目蔵元）、佐渡島に戻りました。新潟県はたくさんの小さくても高品質な蔵元が存在し、佐渡島にも5つの蔵元があります。佐渡は現在450羽を超える朱鷺が舞い、自然環境がよい場所です。朱鷺の放鳥が開始されて以降、佐渡市は、「朱鷺と暮らす郷づくり認証制度」を発足し、生き物をはぐくむ農法の拡大に取り組んでいます。私たちの契約農家さんの相田さんも認証を持ち、牡蠣殻農法を行っていらっしゃいます。山からきた水、かきの殻のミネラル分を活用して高品質な米ができます。私たちはこのお米からできたお酒を牡蠣料理に添えることで、お酒造りから地域の循環型のシステムを紹介できると考えています。

2011年、佐渡は農業の多様性を認められ世界農業遺産に認定されました。多様性を感じる風景の一つが棚田です。美しい光景として注目されつつありますが、後継者不足などから維持が難しい状態です。私たちはその棚田のお米でお酒を造ることで棚田の農家の方のサポート、持続可能な地域づくりにお役に立ちたいと考えました。『龍の恵み』というお酒をつくり、お酒と共に棚田の物語を広げているところです。

この『龍の恵み』を仕込んだ場所は、廃校を酒蔵として再生させた学校蔵というところです。学校蔵では太陽光発電で、再生エネルギーを導入しています。今年は新型コロナウイルス感染症で残念ながら中止となりましたが、毎年一度、6月に開催している「学校蔵の特別授業」では、外部から有識者を先生としてお招きし、島内外、いろんな世代、いろんな立場の人が集まって授業スタイルで学ぶワークショップを行っています。

また酒造りを学びたい人を約一週間受け入れる少人数の体験プログラムも行っています。一週間という長い期間、学校蔵に通ってもらうことによって酒造りに触れてもらいます。参加した初日から役割があるおかげで、初対面の方も非常に仲が良くなります。佐渡の水、米、歴史といった佐渡を学ぶ機会にもなります。海外からの参加者も多く、フランスから来られた方は帰国してわずか1か月後に佐渡を再来されましたし、香港から来られた方は体験酒造をきっかけに佐渡に移住されました。

昨年まで学校蔵ではリキュール免許でお酒を製造しておりましたが、2020年、内閣府の「日本酒特区」第一号として認定適用され、日本酒での出荷が叶うこととなりました、また、japan times Satoyama大賞をいただきました。新型コロナウイルス感染症が落ち着いたあとになると思いますが、他の佐渡観光と連携した半日プログラムもつくっていきたいと考えています。

お酒造りは佐渡の資源の循環につなげられると考えます。サステイナブル、持続可能な地域の成長につなげていきたいと考えています。

石井 哲也さん　新潟市東区長

新潟市東区は空港と港を有する空と海の玄関口です。人口約14万人、産業を支える火力発電所、製紙工場などの大きな煙突があるほか、国産木材を一時保管する貯木場が整備された通船川などがあります。観光の面からは、東区にある新潟空港の利用者増加があげられます。平成30年度（2018年度）の利用客数は11年ぶりに110万人を超えました。新型コロナウイルス感染症で乗客は減少していますが空港利用者をどう地域に取り込んでいくかが課題です。また昨年度のクルーズ船の受け入れは14回でした。港でのにぎわいを東区に波及させていきたいと考えています。

これまでの東区役所の取り組みです。東区の産業のイメージを向上させたものの一つとして、東区工場夜景バスツアーがあります。新潟県立大学学生が通船川の活用策を授業の一環で考えられ、現在東区役所が主催・企画しています。定員に対して申し込み倍率が数倍になる人気のツアーとなっています。

過去3年間の参加者は男女比4：6で、50～60代、開催地である東区の方が多くなっています。参加者からは工場夜景があることを初めて知った、工場は想像以上に綺麗で迫力があったと感想をいただいています。ただ、今年度は新型コロナウイルス感染症で積極的なPRができませんでしたが、今後も市外、県外へのアピールをしていきたいと考えています。そのほか東区産業・観光フォトコンテストを産業のまち、夜景、四季をテーマに開催しました。

東区の20代前半の県外転出理由としては81％以上が職業に関連していました。新潟県立大学学生も就職を機に転出する傾向があり、就職先として東区の魅力ある企業情報を発信していく必要があります。

私たちの取り組みは、皆様からのサポートがあってできています。今後も皆様のお知恵やお力をお借りして、東区の魅力をより広くPRし、さらに発展させていきたいと考えています。

坂井 良宏＝スーパー・ササダンゴ・マシンさん　坂井精機㈱ 代表取締役

東京のDDTプロレスリングと松竹芸能に所属しながら、普段は新潟市東区の金型工場・坂井精機株式会社で三代目として仕事をしています。得意技は垂直落下式リーマン・ショックというプロレス技と、パワーポイントを使ったプレゼンテーションです。

実家の坂井精機株式会社では、主に「精密プラスチック金型」と「粉末冶金（やきん）金型」を取り扱っています。現在は、自動車用部品、デジカメやパソコン等の家電製品部品、計測器部品、医療用部品など、様々な分野の部品を生み出す金型を生産しています。しかし、自社製品ではないので、どのような製品の部品をつくっているかなどPRできないのが悩みです。

2020年6月に、会社をつぐことになりました。やっているプロレスと両立できるか、今の受注を継続できるか、40人の従業員とその家族の生活を守れるのか、いろいろ不安のなか、コロナショックがすすみ、売り上げが前年の3割減りました。

そんな中、新潟県立大学の公開講座の話を区役所からいただき、さらに区長自ら、『ササダンゴさんもパネリストとして、東区が産業観光を今後どう情報発信していくか。一緒に考えませんか。』と声をかけていただき、断れなくなりました。

新型コロナウイルス感染症の流行の中で、東京と新潟を往復することも少なくなり、会社にいても残念ながら金型の仕事はない。スポーツジムもいけないので、東区中を歩き回ってみることにしました。港、川、あてもなく端から端まで歩き続けました。取引先の町工場はこんなところにあるのか、いつも見ている煙突の根元はこうなっているのか。物や人の流れが、なんとなく見えていく気がして、東区の地域を知るいい機会になりました。その時歩きながら聞いていたのがスマートフォンのラジオ、それも地元のラジオやコミュニティFMでした。

サード・プレイスとは、コミュニティにおいて、自宅や職場とは隔離された、心地のよい第3の居場所を指します。ここ東区は、居心地は悪くないけれど、そんな居酒屋、カフェ、近所の図書館のような、居心地のよい場所がもっとあってもいいなと思いました。

そんな中、ラジオもそのような場所なのかな、地元で共有できるものなのかな。自宅でもSNSでもなく、電波もそのようなコミュニティの場所なのかなという発想がでてきました。

この地元である新潟市東区にFM局を作りたいです。物、人とストーリーを伝える場所にならないか、人と人をつなぐ役割、情報発信の場にならないか、というのがこれからやっていきたいことです。引き続き応援よろしくお願いします！

清水 伸さん　㈱博進堂 代表取締役社長

博進堂は大正10年（1921年）創業の東区にある印刷会社で、今年で100周年を迎えます。私どもの工場に掲げています「ART FACTORY」は、私たちがつくるものは未来へつながる美しい作品であることを宣言しています。工場そのものをミュージアムにしようということであちこちに現代美術の作品があります。

私の仕事は企業理念の実現です。博進堂では「社志」と「社訓」として、それぞれ3つの企業理念を定めています。一、新しい価値を共に創造します。一、仕事を通じて人間の成長を支援します。一、未来へつながる美しい作品づくりを追求します。紙文化というのは非常に貴重な文化、作品として残すその領域でこそ、その価値を発揮し、生き残るのではないか。近江商人の商人道「三方良し」のように自分たちだけがよくなるのではなく、顧客も地域も良くなっていくことが大事であり、顧客の皆さんや社会から支持されて始めて私たち企業も生き残っていけるのではないでしょうか。

仕事の内容としては北海道から九州まで全国の学校の卒業アルバムを手掛けています。社員の4割が女性社員です。女性社員が4年前に新潟市からご支援いただいて、男女共同参画、女性社員の活性化ということで委員会をつくりました。そこからオープンアートファクトリーが始まりました。燕三条のKoubaの祭典に触発され、うちの会社の魅力はものづくりの現場ではないか、地域に開放して観ていただこうというアイディアでした。いい発案でした。全社員を巻き込んで3年前にものづくりの現場見学（デザイン制作～印刷製本加工）だけでなく、独自の印刷技術紹介やアルバムづくりの教室、写真撮影の教室、飲食を楽しむCAFÉなど色々考えて実践してくれました。私たちの木工団地にある、仏壇屋さんもこの中にお店を構え参加してくれました。弊社のデザイナーが手掛けている巻町にある「鯛車」など郷土が誇る文化も発信し紹介しました。

東区にも関東圏の修学旅行を誘致し、産業教育観光ができないかと考えています。東区の街歩き、工場見学ツアー、町の歴史を学ぶなど、地域の様々な記録を残し歴史や産業を学ぶ観光があっても良いと思います。修学旅行だけでなく、地元の子供たちにも、ふるさと新潟の産業や歴史を幼少の頃から学ぶことで、郷土愛を育み、将来、新潟へ戻り、働こうという動機付けにつながる機会になればと考えます。

新潟市と燕三条、佐渡をつなぐことで産業教育観光の国際化も実現できるのではと考えます。このセミナーが皆さんと共に考え、創っていく場へと、つながることを願っています。

髙橋 彰さん　新潟交通㈱旅行企画課

普段、私たちのバスツアー、旅行サイト『新潟交通の旅くれよん』は、国内旅行を主に扱っています。昨年3月―6月新型コロナウイルス感染症による緊急事態宣言から、旅行はすべて中止になり、7月に再開いたしました。現在は、自宅からおよそ1時間圏内の地元や近隣への短距離観光であるマイクロツーリズムが人気です。個人型のプランは佐渡、岩室温泉、瀬波温泉などが人気です。

新潟東区工場夜景ツアーも東区さんと共同でつくっています。14倍の申し込みがあることもあり、人気は幻想的な風景や産業観光、東区のグルメとして航空自衛隊新潟分屯基地 新空（にいから）からあげも皆さまに好評でした。

今回のお話から、佐渡、燕三条、新潟2泊3日の産業観光ツアーも着地型商品として販売できるかなと考えています。東区の消防防災航空隊を見学、佐渡にわたり、佐渡に泊まり産業遺産や酒造をみて、新潟東区に戻ります。産業観光、夜は工場夜景をみて、燕三条に泊まります。翌日地場産業見学や、地場のものに触れるプランです。

産業観光の場合は民間の工場などが対象になるのに対し、最近はインフラツーリズムも人気です。ダム・橋梁・道路など土木系の公共財が主体となります。

国道289号八十里越工事現場、南会津のあふれる自然、河井継之助の足跡などをめぐるツアーを国土交通省の監修のなかできるのかなと考えています。

新潟の産業の魅力再発見、感染症リスク低減、地域の企業のアピール、グルメ企画としてつなげられないかと考えています。

総括　コーディネーター 山中 知彦

6名のパネリストの発表を受けた後のディスカッションでは、新潟市東区と燕三条および佐渡の広域連携によって、当該地域の産業観光の活性化がもたらされることが確認されました。観光客にとっては選択肢の豊富化・地域の物語をめぐる魅力の増大・他が、地域産業にとっては相互交流・啓発・他が、そして行政にとっては地域活性化・税収増・他が挙げられます。

そして、各パネリストのコロナ禍での試行錯誤の報告や会場との質疑応答を通して、今後の産業観光の進むべき途として、非日常（イベント重視）から日常的（ノーマルな）活動へ、さらに単なる観光から「観光+教育+人材育成+市民の誇り」という複合的な目標へ、といった方向性が浮かび上がってきました。

最後に、参加者全員が新潟市東区を軸とする産業観光の広域連携に向け、産官学連携で今後の具体的なプログラムの展開を目指すことを確認し、公開講座を終了しました。

特集1 | 学生の活動

まちづくりサークルの活動について

人間生活学部 健康栄養学科 2年
井原 海詩

まちづくりサークルは現在14名で、学年・学部学科に関係なく、まちづくりに興味のある人が集まって楽しく活動しています。昨年度は、「まちあるき」をしたり、東山ノ下フェスティバルや、中地区コミュニティーセンターでの夏祭りにボランティアとして参加させていただきました。「まちあるき」では、東区の中をグループごとにテーマを決めて歩き、そこで撮った写真や感想をまとめて冊子を作り、学内の数か所に置かせていただきました。また、東山ノ下フェスティバルでは、ステージ発表やアユのつかみ取り、出店などのお手伝いをさせていただきました。このボランティアでは、地域の方々に混ざってお手伝いをさせていただく中で、昔流行った歌や演歌の合いの手の入れ方など、普段同年代の友達と過ごしている中では知ることができないようなことを、たくさん教えていただき、とても貴重な経験になりました。さらに、卒業生の方などから様々なイベントやボランティアを紹介していただくことも多く、興味を持った人は気軽に参加しています。

今年度は新型コロナウイルス感染症の影響があり、そのようなイベントにはあまり参加できていませんが、オンラインで顔合わせをしたり、「大学生のうちにやりたいこと」「新潟の好きなところ嫌いなところ」といったテーマを決めて意見を交換したりしました。12月のはじめには、新たなメンバーで「まちあるき」を行い、各班でその様子や感想などをSNSに投稿しました。今後は、さらに範囲を広げて「まちあるき」を行い、観光では気づけないような新潟の魅力を発見して発信していくとともに、メンバーそれぞれが興味を持ったことをサークルを通して気軽にチャレンジしていこうと思っています。

東山ノ下フェスティバルで撮った写真です

「まちあるき」で撮った写真です

そらいろ子ども食堂の活動について

人間生活学部 健康栄養学科 4年
坂井 萌香・中易 萌香

そらいろ子ども食堂は、2016年10月から活動を始めて4年目の活動です。月に一回子ども食堂を開催し、学生が献立の考案・調理を行った食事の提供、希望する子どもたち皆で遊ぶ企画を実施し、子どもからお年寄りまで誰でも共に食事をすることができる地域の居場所として活動しています。新型コロナウイルス感染症が流行し、会食形式の開催ができなくなる中、2020年3月から6月の間は、簡単に作ることのできる料理のレシピや小麦粘土など家でもできる遊びのSNSへの投稿、参加者の方へメッセージを考え手紙を送付するなど、参加者の方の少しでもそばにいられるようにと取組を行ってきました。しかし、SNSを見られる人は限られているなど、私たちの活動が参加者の方々に届きにくいという点が課題でした。そこで、地域の方々と直接的に関わることができる活動として、7月からフードパントリーを始めました。毎回、約30名の方々が参加してくださり、フードバンクにいがた様や生活協同組合パルシステム新潟ときめき様など、様々な団体から寄付していただいた食材を配布しています。子どもたちが果物やお菓子を嬉しそうに受け取っている様子が見られ、また、保護者の方々からは「とても助かる」などのお言葉をいただいています。お米や野菜、お菓子と併せて、学生手作りのカップケーキなどを配布した際にも、子どもたちだけでなく保護者の方々、地域の方々に喜んでいただくことができました。

日本の子どもの貧困、子ども食堂について知った事をきっかけに、自分にもなにかできないかと思い、学生が主体となり運営する、そらいろ子ども食堂に参加しました。子ども食堂の活動に参加する中で、逆に子どもたちの元気な姿に私たちも元気をもらい、子どもたちが成長していく姿に喜びを感じ、そして、地域の方々の温かさに触れることができました。

参加者の皆さんからの「ありがとう」という言葉と笑顔が今の私たちの支えになっています。

私たち4年生は今年度をもって引退となります。通常通りの開催が難しい状況がまだ続いている中での後輩へのバトンタッチとなりました。子ども食堂は、開催する私たちだけでなく、支えてくれる皆さん、参加してくださる皆さんがいてこそ成り立つコミュニティであるということを改めて強く感じました。これからもそらいろ子ども食堂をどうぞよろしくお願いいたします。

特集2 | 教員の活動

神谷睦代准教授の活動紹介

神谷准教授は、2017年より4年に亘り、秋から冬にかけて、東区役所でのクリスマスツリーの飾りつけや絵本パネルの展示を行うとともに、新潟日報主催の「絵本ワールドinにいがた」（会場：朱鷺メッセ）では地域の親子を対象に造形ワークショップの開催、入口アーケードのデザイン・制作・設営等の活動を続けています。

教員プロフィール

【所属】人間生活学部 子ども学科
【専門分野】美術・幼児造形表現
【担当科目】子どもの造形、保育内容造形表現Ⅰ/ⅡA/ⅡB、造形基礎、美術、Picture Books and Toys in the Worldなど

東区役所での活動 造形活動を通してのコミュニケーション

クリスマスツリーに飾りつけるオーナメントは、身近な材料（紙皿・折り紙・新聞紙・布・リボン等）で子ども学科の学生が授業中に手作りしたものです。また、飾りつけは有志によって行われます。本年は、新型コロナウイルス感染症対策のためにイベントの開催はなくなりましたが、展示は例年通りに行われることになったので、区役所を訪れる皆様に、少しでも明るく楽しい気分になっていただければとの願いを込めて取り組みました。

6年ほど前に東区役所からの、地域住民を対象にしたイベントの「空間づくり」への協力依頼によって、この活動がスタートしました。造形活動を通じた学生と社会とのコミュニケーションの場であると同時に、大学での子ども学科学生の学びの成果を発表できる機会となっています。

「絵本ワールドinにいがた」での活動 子どもと教員・学生とのふれあい

「絵本ワールドinにいがた」は例年11月の第3日曜に開催されます（※本年度は新型コロナウイルス感染症対策により2021年3月27日㈯に開催予定）。このイベントでは、人間生活学部子ども学科の斎藤裕教授と植木信一教授と神谷准教授が造形ワークショップを開催します。学生はアシスタントとして参加します。会場では、教員も学生も、工作の作り方を教えたり、またアイデアの相談にのったりと、子どもたちとのふれあいを大切にしています。他に、会場入口のアーケードや絵本キャラクターのオブジェも設置します。そのため、準備は前期授業から始まっています。

学生には、このような地域との連携による活動を通して、大学での造形に関する学びがどのように社会と繋がっているのかを実感することで、造形表現の意味を理解し、将来に役立ててほしいと考えています。

山中知彦教授の活動紹介

山中教授は、東日本大震災直後の連続公開講座で「新潟で東日本大震災を受け止める」を地域連携センター長としてとりまとめました。以来、被災地域での調査研究活動を授業で紹介し、学生たちに継続的に地域を見守ることの意味を伝えています。

教員プロフィール

【所属】国際経済学部 国際経済学科
【専門分野】地域デザイン
【担当科目】地域デザイン論Ⅰ/Ⅱ、新潟県の地域計画とまちづくり、地域情報論など

写真パネル巡回展「帰還困難区域に生きる」

東京電力福島第一原子力発電所事故から10年をむかえた2021年1月から3月にかけて、原発から最も遠い帰還困難区域の飯舘村長泥行政区をはじめ、福島県阿武隈高地に残された被災地の記憶を広く県外に伝えるために、東日本の5都市を巡る写真パネル巡回展を開催しました。

飯舘村長泥行政区との関わりは、2012年の夏、地域の茶の間の発祥の地である新潟市東区の「うちの実家」で、当時の区長の鴫原良知さんと出会った時に遡り、以来バラバラに避難生活を送る住民へ情報を届けるための区報の編集発行を引き受け、現在38号まで続いています。

巡回展の最終開催地を新潟にし、震災発生の3.11から4号機原子炉建屋の損傷によって発生した放射能プルームが長泥行政区に雪を降らせ、遠隔地ながら高線量汚染が生じた3.15までを会期としました。それは、長泥行政区との関わりの原点回帰と併せ、本学学生や原発事故後いち早く被災者を受け入れた新潟県民に、巻原発計画の撤回を実現した一方で、東洋一の規模を誇る柏崎刈羽原発が立地する新潟の地域社会について考えてもらうきっかけとしたいと思ったからです。

展示する写真パネルは、この間に知り合った福島を思う多くの方々との協働の賜物です。さらに今回は、若者向けに情報発信をするため、フライヤーとポスターを担当したデザイナーの提案で、インスタグラム特設サイトを開設し、会期中毎日一枚写真を更新しました。写真パネルのキャプションとインスタグラムは、海外への情報発信も想定し、日本語英語併記としました。

コロナ禍にもかかわらず、各会場の来場者や多くのメディアから賛同の反響を頂くことができました。

新潟県立大学
University of NIIGATA PREFECTURE
■お問い合わせ先
地域連携センター

2021年3月発行

TEL 025-368-8225 FAX 025-364-3610 E-mail：unpreco@unii.ac.jp URL https://www.unii.ac.jp/
〒950-8680 新潟県新潟市東区海老ケ瀬471番地